

自我を育てる

――発達の動力を生み出す保育――

津守 真

子どもと一緒に過す「いま」を充実させるとき、そこから子どもの能動性が動きはじめ、社会性が生み出される。

前号と前々号に記したが、私がみなければならぬクラスの子どもたちのことを気にすればするほど、K男は私の手をひいて歩きまわり、要求し、私の注意を他に向けることを許さなかった。

私がK男と過す「いま」をたのしむことができるようになったときから、事態は変化した。これは私自身にも驚くほどで、毎日何か新しいことをK男ははじめた。保育の実践をしている人は、同様のことをいろいろの場で体験しているのだと思うが、これは現実の社会の場で保育者が自分自身を実験台にして発見していることである。

追いかけてこのはじまり

六月のはじめ、K男は登校しずっとたつてから、幼稚部の部屋にいる私のところにきた。これまで、朝いちばんにK男は私を探しまわるのが常であった。

私は立ち上り、庭から入ってくるK男に近づき、立ったまま体をかかえて顔を近寄せるとけらけらと声をあげて笑う。それをくり返すうち、トランポリンのまわりを走り回りながらふり返って笑い、私に追いかけさせる。私が追いかけてつかまえ、抱きかかえると大声で笑う。戸口から庭の方にK男はかけてゆくが、私は室内の子どものことが気になるので、戸口でK男に應待する。そのうちにガラス戸をへだてて顔を合わせ笑い合うのが面白くなり、K男は庭に走っていったのは戸口にもどって私と笑い合うことを何十度もくりかえす。

私はK男だけを相手にするわけにゆかず、K男が庭の方に走ってゆくたびに他の子どもに向うのだが、じきにもどってきて私に追いかけさせ、ガラス戸ごとに顔を合わせ、大きな口をあげて笑い合う。K男は髪の毛の中も背中も汗びっしょりである。こんなに単純なことがK男にとってはどんなに面白いことが察せられる。

そのうちにK男は滑り台に下からのぼり、私についてきてほしそうだったが、私は室内からはなれられないでいたら、どこかにいってしまった。あとになって分つたのだが、この間一時間ぐらい、庭の流しで他の子どもたちや先生と一緒に水で遊んでいた。

この日にはじまった私に追いかけて笑い合う遊びは、追いかけてこの端緒だろうと

思う。ふり返ってみると、つい一週間前までは、K男は私に顔をびったりと寄せ目を合わせて笑い合うやりとりを好み、私から離れようとしなかった。そのやりとりが、空間的に距離をへだて、時間的に間をおいてなされるようになったのである。汗をかくほどにこうして過す時間を充実させ得たときに、K男には充実した能動性が生れ、その同じ能動性をもって別の活動に向っていった。

「いま」を肯定する

K男が私のところを去ったあと、Y子がO先生とトランポリンにきた。Y子はこの数週間、O先生にくっついていることが多いのだが、この日もトランポリンをとぶのでもなくおりのでもなく、大人によりかかって時を過している。私は第三者として見ているときには、形にはならなくとも先生と過すこうした生活がY子に必要なことがすぐにはわかる。しかし、自分がその立場におかれると、もっと秩序のある違った生活の仕方がありうるのではないかと考えてあせることがある。どうしてなのだろうか。だが、そう思うことは、その子どもと過す「いま」の生活を肯定していかないことになる。もっと違った生活になってゆくにしても、子どものいまの生き方をそのままに肯定するところから、未来は生み出される。K男のことを考えても、私から離れようとしなかったそのK男を肯定し、共に過す時間を充実させようとしたところから、この日の追いかっこは生まれたのであった。

自我

一時間ほどたって、K男が私のところにもどってきたとき、以前やっていた顔を密着させ目を合わせて笑いあう遊びを私に要求した。長い時間私からはなれていたので、十分につき合うことが必要と考えて、私は何度もその遊びをした。そこに突然Y子がきて、K男の髪を引張った。K男は泣き声を出して立ち上り、私の手をひいて部屋を出た。私はK男にひかれて一緒に庭に出た。

以前だったらこういう場合、K男はどうしてよいか分からなくなり、自分を喪失し、声を上げてふらふらと歩きまわるだけだった。この日はしっかりと私の手をひいた。それからK男は滑り台を下からのぼり、いつものようにバルコニーの棚の一端に私の頭を固定させるのだが、こうでもない、ああでもない、いつもよりいろいろに試みる。どうやったら私を確保しておけるかを考えているみあいである。そのうちに、二階の窓から室内の大人の顔がみえると、その人に声をかけて笑う。さつき髪の毛を引張られたことは、もう忘れたかのようにであった。

髪を引張られるという、K男にとっては突然の受け身のできごとが起ったとき、すぐに平常にもどるほどに、それに立ち向う自我の強さができたと云ってよいだろう。自我の輪郭などほとんどないかのように、だれかに叩かれたときに手向うこともせず崩れてしまったK男であったが、いまや、しっかりと自分を保っている。水あそびで自分の手に握っているホースを、他の子どもがとろうとしたときも、放さずに持っているのである。何週間

も私にくつついてはなれないように思えたその間に、K男にこのような自我の強さができている。

だるまの目玉に色をぬる

職員室にいくると、K男はまず窓をあけ、道路を走る自動車をしばらく見てから私と顔を接して笑い合う遊びをするのが常であるが、この日は、K男は窓をあけることもせず、棚の上の大きなだるまをおろして、目玉をマジックで塗りはじめた。それは数日前からしているのだが、目玉をぬりはじめると他のことは目にはいらなくらい、ぬることに余念がない。赤、青、黒、紫などでぬりこめられただるまの目玉は、青黒く光っている。K男は自分を打ちこむ対象を見出した。そしてぬり終ると、私におぶわれて保育室に出ていった。

ふり返ってみれば、K男はずっと前から人の目に関心をもっていた。二年半前に私共のところに来たときには、目を合わせることが少なかった。それから絵本で顔の絵をとくべつに好むようになり、また、私を片隅に押し込めて、目を見合う遊びを長い期間にわたってやった。いま、だるまの大きな目玉を、自分の手を使って、マジック、えのぐ、鉛筆などで熱心にぬるのは、この子どもにとって人の目がとくべつな意味をもつからだろう。ときによって、K男が私の顔をうかがい見るときの目は、私の目の奥にひそむ心を見透しているように思うこともあった。

K男の心に長くひそんでいた精神的課題が、いま、自分を打ちこむ活動に表現されはじめた。

食事

この日、弁当のとき、K男はじっと坐って食べつづけた。いつものように途中で何度も立たない。手で食物を口にいれて食べるのは、外界の物を自分の中に取り入れる行為であって、生物的要求と結びついた、自我の確立の初期段階に属する。K男が私にくっついて離れなかったときも、弁当のときには、自分の手で食物をひとくち口にされると、私からはなれて庭に出ていった。食物を摂取することを通して自我の領域が確認され、自分がいと思うことをするのが容易になる。幼稚園でも、昼食のあと、子どもたちが自分らしい遊びをはじめるのはこのことの故でもある。

この日、K男は最後まで坐って弁当をすっかり食べ終ると、庭に出てゆき、それきり私のところにもどってこなかった。

他の子どもを避けない

帰りの時間に近くなって私は庭に出たときK男に出会った。K男は私の手をひいてシーソーにゆき、しばらく二人で乗っていると、別の子どもがきたので、私はその子どもと位置を代った。しばらくの間、子どもたちだけでシーソーをこいでいた。以前だったら、他

の子どもが同じ場に來ただけで、K男は私の手をひいてその場を立ち去ったのだった。

社会的になること

K男は、いろいろな大人たちの顔をのぞきこんで笑う。もはや、前号に記したような私との間の閉じた空間の中にだけいるのではない。K男が充実した時間を生き、能動性が生まれ、自我が確立してきたときに、他の人に対して関心をもちはじめた。K男自身が社会化されてきた。これは社会への適応とはちがう。子ども自身が内側から社会化され、社会的人間となることである。

保育者と共に「いま」を充実して過すとき、その充実感是他の物や人にも向い、子どもは能動的に世界とかかわるようになることを、新学期の二ヶ月間に私はあらためて知らされた。個々の活動をやらせようとあせるよりも、子どもの自我を育てることに力をつくすならば、子どもは自分のしたいことを自分で見出し、価値ある活動を展開させる。

四月からの子どもの変化をかえりみると、この変化を発達と云ってよいであろう。毎日の保育の中で、疑い、試み、たのしみ、考える日目を重ねるうちに、私が問題としていたことは解け、子どもは一步先に進んでいる。発達を生み出す動力は、大人と子どもとかわる保育の生活の中にある。

(愛育養護学校)